2017 年度人文科学研究所総合研究旅行（千葉）行程記録

樋口　博美

2017 年 7 月 29 日（土）

朝の 9 時、JR 西船橋改札口に参加者たちが集合すると、そこから歩いて数分のところに待機していた貸し切りバスに皆で乗車し、まずは習志野市に向かって出発した。

１．陸軍騎兵旅団司令部跡等

文学部歴史学科の田中正敬先生の説明案内で、習志野市の東邦大学、日本大学の敷地内、および近隣の住宅地を歩きながら陸軍騎兵旅団司令部跡をはじめとする軍事施設の跡地を視察して回った。13 連隊発祥の地は東邦大学の敷地内にあり、14 連隊が置かれた区画は日大生産工学部の敷地内となっていた。連隊関係者や当時の市長などといった人たちによって建てられたさまざまな碑（文）にはそれぞれに興味深い文字や説明などが刻まれており、皆でそれらを静かに黙読した（写真 1）。昭和の終わりや平成以降のものもあり、戦争の記憶が脈々と受け継がれていることが感じられた。

写真 1　碑文を読む参加者たち（東洋大学敷地内）

第 15 連隊と第 16 連隊の区画は、大学の西側、住宅地の広がる中にあった。陸軍習志野学校などの遺構があるとのことで、印象的だったのは、頑丈そうな門柱の跡（写真 2）と、学校の弾薬庫の跡だったという不自然な休憩場所（写真 3：地面から 1 メートルほど盛り上げたコンクリートの上に木製ベンチが設置されている。落ちないように？わざわざ柵が設けられている）である。

写真 2　頑丈な造りであったろう門の跡

写真 3　泉公園内の不自然な休憩場所

休憩がてらに寄った習志野市民プラザは、この建物とその背後にある八幡公園近辺が騎兵第一旅団司令部跡とのことであったが、今はどこも穏やかな風景ばかりである。プラザ内には休憩場所があり、誰でも自由に休める憩いの場となっており、近くの農家で生産されたものであろうか、トマトやキュウリ、とうがらしのような野菜がお得な値段で館内に並んでいる。入り口玄関先には町の人々の手になる工芸品や民芸品が所狭し、と置いてある。しかし一方で、ここにはかつて明治 33（1900）年に騎兵旅団司令部が建てられた地であることが司令部の建築ジオラマとともに目立つところに記されており、また習志野女性史聞き書きの会による戦争を記録した冊子が置いてあったりと、戦争の記憶が生活の身近にある町であることが感じられた。

２．DIC 川村美術館見学

佐倉市にある DIC 川村美術館では、休憩後 13 時から 1 時間ほどの美術鑑賞、美術館見学となった。

DIC は印刷インキや顔料を手がける会社だが、ここが関連会社とともに美術品を収集して 1990 年に開設したのが DIC 川村記念美術館である。建物の外にも広い敷地内の風景に溶け込んだオブジェが点在し、自然を取り入れた散策路美術館になっているようであった。

美術館の説明には「17 世紀のレンブラントから、19 世紀のルノワール、モネらの印象派を経て、シャガール、ピカソに至る西欧近代絵画、横山大観や尾形光琳らの日本美術の名品を幅広く展示しています」とある。私たちが訪れた時期は「静かに狂う眼差し展」として DIC が所蔵するコレクションの中の現代絵画 90 点が林道郎氏の視点から 4 つのテーマを持った章に分けて

展示されていた（第 1 章 密室の中の眼差し、第 2 章 表象の零度―知覚の現象学、第 3 章 グレイの反美学、第 4 章 表面としての絵画―ざわめく沈黙）。例えば第 1 章ではアンリ・マティスを例に、題材としての絵画の対象とそれを見る欲望の関係について思考することを試みる、第 3 章ではジャスパー・ジョーンズの鉛の作品が並び、現代美術で灰色が大きなウェイトを占めるようになった意味を探る、という具合である。

他に常設で印象的であったのは、マーク・ロスコ（1903-1970）の「シーグラム壁画」が収蔵されているロスコ・ルームであった。シーグラム壁画とは、ニューヨークのシーグラム・ビルにオープンするフォー・シーズンズ・レストランのためにロスコが描いた作品（30 点）だそうだが、オープン前のレストランに幻滅したロスコが収蔵を拒み、作品はその後テート・ギャラリー、フィリップス・コレクション、そして DIC 川村記念美術館（7 点）に分割収蔵されることになったという。とにかく一枚が見上げるほどの大きさである。部屋が暗いせいもあるのか、ずっと絵の前にたたずんでいると自分までそのなかに取り込まれてしまうような感覚を覚える。取り込まれる前に次の作品に目を移し、一つ一つをめぐって部屋を出た。単純に見えるのに強烈な作品である。そして、これとは対照的な日本画の部屋もあり、ここでは鏑木清方の双幅対の掛け軸に描かれた女性の姿絵が印象的であった。女性が着用している紹の着物の下から透けて見える襦袢の模様までが見事に、繊細に描かれており、この一枚に日本の文化や技術が凝縮されているかのようであった。しかし後日、DIC 川村美術館の日本画作品展示が 2017 年 12 月で終了し、国内の美術館・博物館等へ売却することになったことを知らされた。とても残念ではあるが、絵画は消滅しないことは今回の DIC 川村美術館が教えてくれたことでもある。またどこかで会えることを期待しよう。

こうして私たちは 17 世紀西洋美術、20 世紀アメリカ芸術から江戸期日本の屏風絵といった数々の絵画や立体アートから、作品の生まれた背景、そして置かれた世間について思索したのである。

３．上総国分僧寺、国分尼寺跡

美術館を後にして、次に向かったのは、市原市の上総国分尼寺跡と上総国分僧寺跡である。15 時に到着すると市原市の職員さんから歴史や展示物に関する話をうかがい、さらに復元遺構を見学しながらの説明を受けた（写真 4）。

そもそも国分寺とは、聖武天皇の治世に、異常気象、飢饉や疫病、政争や反乱で乱れた国を鎮める（仏教による鎮護国家を目指す）目的で、全国 68 か所それぞれに国分僧寺と国分尼寺の 2 つの寺を建立する詔が発布されたことに始まる。男寺である国分僧寺は金光明四天王護国之寺、女寺である国分尼寺を法華滅罪之寺（法花寺）という。僧寺と尼寺にはそれぞれ役割があっ

たようで、国分僧寺には必ず七重塔を建て、そこに護国経典である金光明最勝王経を納めなくてはならないとされた。私たちが先に訪れた「上総国分尼寺」は、寺域が全国で一番広いという。その復元ジオラマには湯屋や大炊屋、金属工房など生活に密着した設備があり、集団での生活があったことがうかがえた。尼僧に欠員が出たらすぐに新たに入れるように、という条項もあったという。実際に再建されているのは（整備の開始は平成２年から）、中門とそれを囲む回廊（写真５）、そして金の灯籠（写真６）だけであるが、かつての敷地の広さを十分に体感することができるものであった。忠実に再現したとのことで、たしかにその史跡的価値も高いのだが、市原の人々の郷土の歴史や文化の見直し、保存への意識の高さが感じられるものでもあった。

写真４　案内役の方を囲んで説明を聞く

写真５　復元された国分尼寺の回廊

写真６　国分尼寺金堂前にあったという金の灯籠

その後、一行はバスで国分尼寺からほど近い国分僧寺跡に移動した。ここでは住職から説明を受け、現存する薬師堂、七重塔跡などを見学した。「跡」と聞いていたので、国分尼寺と同じような伽藍を見に行くのかと思いきや、到着すると山門があり、中にはいくつかの建物も残っていた。寺の名前は現在も「国分寺」ではあるが、お寺としては鎌倉時代にできた真言宗のお寺であるという。特に、市の指定文化財である国分薬師堂（茅葺き屋根の三間堂形式で非常にコンパクトな造り）（写真 7）は江戸時代の造りとのことだったが、天井画の飛天が色も鮮やかに残り（写真 8）、皆の目を引いていた。

写真 7　かつての西門からまっすぐ先に見える薬師堂

写真 8　薬師堂内のあざやかな天井絵

最後に、国分僧寺には決まり事の一つとして必ず建てなくてはならない「七重塔」があるが、その跡地へと住職に案内していただいた。少し小高くなった草生い茂る丘に、幅 1.8 メートルという心礎が残るのみであった（写真 9）。この七重塔は、63 メートルの高さがあったことが分かっており、奈良に現存する法隆寺五重塔よりも 2 倍近い高さだったという。

17 時半に国分僧寺跡を出ると、この日の見学・視察は終了、ホテルへと向かった。

写真 9　住職と七重塔の心礎

2017 年 7 月 30 日（日）

４．稲花酒造（有）

雨は降ってはいなかったが、前日からの天候の関係で、一宮町が主催する浜辺での「地曳網」参加の予定は中止となった。その代わりに馬淵昌也一宮町長（元専修大学経済学部教員）が自ら調整、見学の了解を得ていただいたところが長生郡一宮町にある「醸造元 稲花」であった。突然の訪問にもかかわらず、9 時半から 1 時間以上の私たちの滞在に快く応じて丁寧な説明をしていただいた。

文政年間創業の稲花は、400 年ほど前に一宮に移り住んだご先祖が庄屋を経て、初代が酒造りを始めたという。現在すでに 200 年以上続いており、今回案内してくれたのは、12 代目当主の貴子氏であった。稲花の現在の建物は江戸時代の建築だそうで、建築関係の研究者なども見学にくるほど貴重なものであるらしい（写真 10、写真 11）。建物や工程の説明を受けるとともに、一宮の歴史のなかでの存在として、網元（漁業）と酒蔵の関係についての興味深い話も聞くことができた。

そもそもこのような機会がなければ全く知らなかったのだが、千葉県の清酒造りの歴史は古く、1624 年からの寛永年間に始まり、1854 年に始まる安政年間から増えていったという。明治 33（1900）年には 237 軒に達したというが、昭和に入って徐々に減り、それでも現在 40 軒が千葉酒造組合に属し、操業している。県内で一番多いのが南総エリアの 9 軒だが、稲花はその一つである。

写真 10　酒蔵の様子

写真 11　酒蔵内部の立派な梁

５．JA グリーンウェーブ長生

11 時には稲花と同じく長生郡一宮町にある JA グリーンウェーブ長生を訪れ、青果の選別出荷準備作業を中心に見学し、主力製品、出荷体制、販売先などについても説明していただいた。

JA グリーンウェーブは、農家の労力軽減と経営合理化を目指し、園芸事業の核となる施設として平成 7 年に稼働を開始した。施設は現在年間 320 日稼働しているという。選果機は野菜や果物の糖度や熟度も確認できるそうである。

いただいた資料によれば、JA 長生の園芸事業は平成 28 年度の年間取扱額が 28.5 億円で、主力品目はトマト、サラダ菜、マスクメロン、ガーベラ、露地栽培で長ネギ、玉葱、梨などである。販売先は、京浜市場を主力にして、地元市場を組み合わせて出荷、一部直販や産地パッケージによる契約販売にも取り組んでいる。協力組織は 21 組織、770 の組合員が参加している。

選果能力は、トマト換算だと 1 日 8500 ケースとのことで、ちょうど私たちが訪れた時もラインにはトマトが載っており、女性たちがトマトをより分ける作業を行っていた（写真 12、13）。周年出荷ということもあるのだろうが、トマトの選果利用者が一番多いとのことであった。出荷を待つ箱が積み上がったコーナーでは、「ながいき梨」が出番を待っていた。この総合研究終了後、町長から人文科学研究所宛てに「あきづき（梨）」が送られてきたが、驚くほど大きく甘い梨であった。

一宮町での見学に最後までおつきあいいただいた馬淵町長にお礼を述べて、バスは次の目的地、鹿島市の鹿島神宮へ向かって出発した。

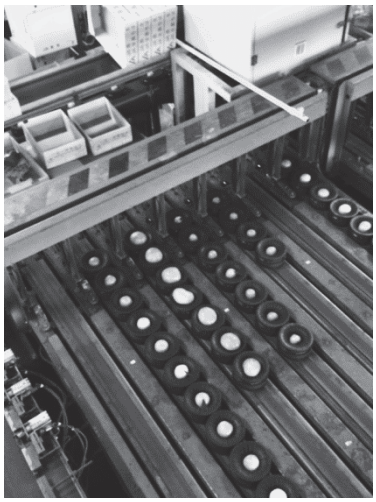

写真 12　選別されるトマト

写真 13　女性たちが多く働いていた

６．鹿島神宮

鹿島神宮は武甕槌大神（たけみかつちのおおかみ）をご祭神として祭る全国鹿島神宮の総本宮であり、常陸国一の宮としての社格を持つお宮である。徳川家との関係が深く、桜門は水戸藩初代藩主徳川頼房の奉納、社殿は二代将軍徳川秀忠による奉納、奥宮はもともと本殿として徳川家康が奉納したものであった。もちろん、社列伝記によれば、神武天皇元年に社殿造立であり、古くは中臣鎌子や源頼朝のような歴史上の人物との関わりもあったお宮である。この歴史的ないわれの多々あるお宮を 14 時から 1 時間ほどかけて、参加者それぞれのペースで本殿、奥宮、御手洗池などを見学して回った。奥宮の帰りに、道を少し逸れて[要石]に立ち寄ってみたが、石柵に囲まれ、突き立てられた御幣がなければ、見逃してしまいそうなほど小さな石がぽつんと、まるで置いてあるかのような風であった。事前の説明によれば、それは石の頭頂部がわずかに出ているだけの霊石で、地震を起こす大鯰の頭を押さえつけている鎮石ともいわれているという（他に大神降臨の際の磐座とも）。柵前の立て札の説明には、『水戸黄門仁徳録』に「七日七夜掘っても掘っても掘りきれず」と書かれていたと記されていた。とてもそのようには見えないのだが、もしそうだとすると全貌はどのくらいの大きさなのだろうかと関心のかき立てられる不思議な石であった。

予定通り 15 時にはバスは銚子に向かって出発した。車内からは遠くに鹿島臨海工業地帯が確認できた。

写真 14　要石（中央 下）

７．うおっせ 21

うおっせ 21 では、展望タワーに直行し、まずは展望階からこれまでめぐってきた方面や銚子を一望した。360 度方向が展望でき、近くの銚子漁港、水産加工団地や巡視船かとりらしき船、目の前の太平洋はもちろんだが、遠くには犬吠埼なども見ることができた。帰り際に水産加工物なども置くみやげもの屋をめぐったが、終了時間直前だったこともあり、ほとんど人がおらず、多くの店が閉店準備中であった。それでも、銚子らしいお土産として練り物を少し買い求めてバスに乗り込むと、次にはバスは一路西船橋駅へ向かい、19 時半西船橋駅到着と同時に今回の総合研究は終了となり、それぞれが帰路に着いた。

かなり盛りだくさんの 2 日間であったが、多面的なさまざまな要素が盛り込まれた有意義な 2 日間でもあった。

行く先々でご案内・ご説をいただいた皆様に深く感謝致します。ありがとうございました。

※文中の写真はすべて筆者撮影。